

住む人が耕し、耕されるまち
 ～調布市を対象とした多義的空間によるコミュニティハブ創出を目指す都市デザイン～

都市空間生成研究室
 1941008 池田 光和子

多義的空間 コミュニティハブ 都市デザイン
 程よいつながり 既存市街地 居住環境の向上

1. 研究の目的と背景

本研究の主な背景として、現代社会における地域と人との程よいつながりの作りづらさを挙げる。都心は極端に地域の人との関わりが少なく、一方で田舎は、地域の人との関わりが過ぎる場合がある。いずれもバランスの良いつながりとは言いがたく、地域内での人々の自発的な活動の幅を狭める要因の一つになると考える。“程よさ”を生み、人々の自発的な地域との関わりや地域内での活動の幅を広げるために、それを促す多様な解釈・使用を許す空間—多義的空間—が必要になると考える。そのような空間は、人々が自由に過ごすだけでなく、集ったもの同士の交流などの地域交流が生まれる可能性も秘めていると考えられる。

そこで本研究では、「多義的空間」の定義を行った上で、「多義的空間」を構成する特徴的な要素を既存事例より抽出し、それらを参考に対象地にて地域交流拠点（コミュニティハブ）の計画提案を行い、今後の既存市街地を活用したまちづくりに寄与することを目指す。

2. 全体コンセプト

本研究では、多義的空間によるコミュニティハブ創出を行う。コミュニティハブとは、人々の出会いの「きっかけ」を作り、地域に“程よいつながりを生む”役割のことである。そして、“つながり”のきっかけ作りには、多様な人々の集い・アクティビティが許容される”多義性”が大切である。以上から、多義的空間を伴ったコミュニティハブの創出を行う。

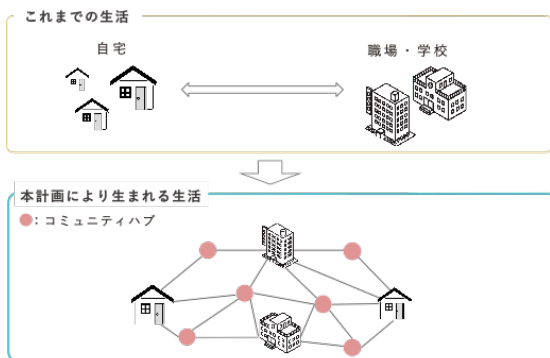


図1. 本計画により生まれるライフスタイル

3. 多義的空間構成要素の調査

3-1. 調査について

本研究の計画提案を行う上で、多義的空間を構成する要素とはどのようなものがあるのかを理解し、参考にするため、既存の事例5事例を抽出し、調査を行った調査を行った。

3-2. 多義的空間を構成する10の要素

調査より、以下の10の特徴的な要素が抽出できた。

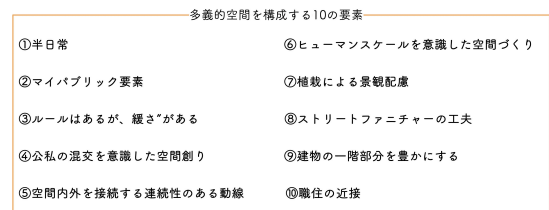


図2. 多義的空間を構成する10の要素

4. 調布市について

4-1. 調布市の地域特性

調布市は新宿・渋谷などの都心と高尾・八王子などの郊外の中間に位置するエリアにある。調布駅周辺には、商業の発達や行政施設などの密集が見受けられ、市民の生活を支えている。加えて、教育・文教施設が多いこと、緑豊かで観光資源が多数存在することも特徴として挙げられる。また、市内には420の市民団体が存在していることがわかっており、多種多様なコミュニティが存在することからも、市民による主体的な活動が地域内で行われていることが明らかとなった。

調査を通じて、豊富な資源・市民の主体的な活動といった地域内に程よい結びつきを持つ素材は点在している一方で、地域内のつながりのきっかけを作るような拠点は見受けられなかった。実際に調布市も、コミュニティ構築・連携などの課題を挙げており、地域交流を今後どのように生み出す・広げていくかが課題としていることが明らかとなった。

また、実際に調布市在住の市民に、調布に住んでいて感じることやどのような空間があったら良いと感じるかなどについてヒアリングを行ったところ、地域内交流を

求めていたり、自由に利用できる空間が欲しいといった声があった。

4-2. まちの課題

以上の地域特性調査により、調布市は人が集まるきっかけとなる資源は豊富にあるが、実際に人が集ったり・地域を活用する場所は少なく、学校や職場、自治会などとは異なる、程よい人々の交流・繋がりを生むための場が求められていることが明らかとなった。人の地域活動がその地域住民の生活を豊かにすることから、人との出会いを生み、交流・発信が行われるたまり場-ほどよい結びつきを生む場-の創出が必要と考える。

5. 計画案

5-1. 計画コンセプト

多義的空間によるコミュニティハブ創出を行い、地域に程よいつながり・交流を生むきっかけを作る。ハブは、地域の集い・交流を生むきっかけの場となるよう、周辺エリアの特性を加味し、設計を行う。本計画により、市民の域内活動とそれによる程よいつながりが生み出されることで、調布というまちが、住民によって豊かになり、住民を育むまちへと変化する。「住む人が耕し、耕されていくまち」になることで、調布市は単なるベッドタウンから内的な豊かさを育むまちへと変化する。

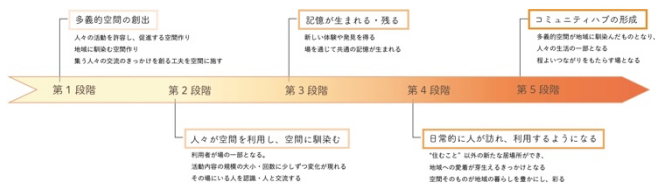


図3. 本計画の全体概要

5-2. 計画地とハブ創出による地域交流のあり方

本計画は、調布市の中でも行政機関・病院が密集する調布駅周辺から観光資源・自然資源が密集する深大寺地区を対象として計画を行う。この地域にて多義的空間で構成されたハブを展開することで、ハブ同士の直接的な関わりはないものの、人の活動・つながりにより結果として呼応し合っているような地域交流がデザインできると考える。

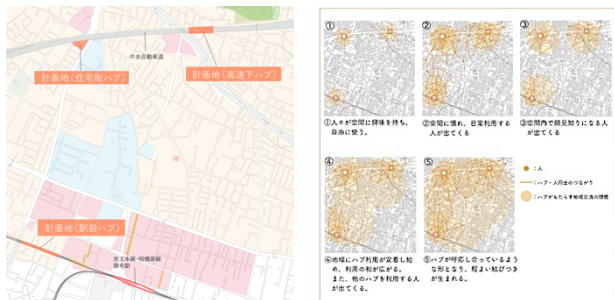


図4. 計画地と地域交流のあり方

5-3. 計画詳細

1) 駅前ハブ

計画地には、元々京王線の線路が通っていたが、再開発により線路が地下化され、空き地になった部分では市民が憩える公園やパブリックスペースの創出などが行われている。このように計画地周辺での市民の活動の場づくりに力を入れている動きを活かし、様々な人々に利用される「まちのたまり場」となるような空間設計を行った。



図5. 駅前ハブのパス・平面図

2) 住宅街ハブ

計画地は、元々特徴的な丸い遊び場のある公園で、昔から変わらない風景として地域に親しまれた空間である。昔の風景の記憶を残しつつ、新しい地域交流拠点空間に変化させることで、多世代が親しみを持てる空間を目指したことに加え、地域住民が集まる「まちのリビング」となるような空間設計を行った。

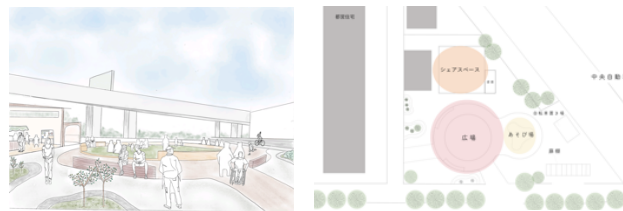


図6. 住宅街ハブのパス・平面図

3) 高速下ハブ

計画地は、中央高速道路下に位置し、同じく高速下にある児童公園と連続してあるため、子供も大人も楽しく過ごせる隠れ場的な存在、「まちなかのヌック」とする。来た人、野川や深大寺へ訪れる人がふらりと立ち寄っても過ごしやすい空間設計を行った。



図7. 高速下ハブのパス・平面図

参考文献

- 「内閣府ホームページ 平成19年度国民生活白書」
<https://onl.bz/M2Xf6H>
(最終閲覧日 2023.1.20)
- 「第5回調布市総合計画策定産学官連携会議」
<https://www.city.chofu.tokyo.jp/www/contents/1648532518256/index.html>
(最終閲覧日 2023.1.20)